

中世千葉氏の妙見祭礼

日暮冬樹

(1) 祭礼とは

- ① 感謝・祈り
- ② 共同体統合の儀式↑年中行事・通過儀礼
- ③ 娯楽性↓参加する者と見物する者⇨イベント化

(2) 妙見信仰

① 妙見信仰とは

- ・ 北辰星（北極星）の尊格化 中央アジアの遊牧民の信仰が中国に伝来

② 千葉氏の妙見信仰

- 「妙見縁起」 ・ 染谷川 平将門・良文と平国香の戦い
- 米「源平鬪諍録」 ・ 蚕飼河 平将門と平良兼の戦い
- ・ 千葉成胤の戦い



妙見神と平良文・平将門（「千葉妙見大縁起絵巻」）

③. 金剛寿寺

真言宗 近世には妙見寺、明治時代に神仏分離によって千葉神社となる。

史料一 「千学集抜粹」

下総国千葉庄池田郷堀内北斗山金剛授寺は、仁王六十六代一条院の御勅願所也、長保二年庚子九月十三日大僧正覚算和尚御建立、御本尊ハ北辰妙見尊星大菩薩、国主下総権介平忠常御代也、此菩薩ハ本地東方浄瑠璃世界の主薬師破軍星にておはします也、此寺は調伏破滅のことハせず、御神の御祈念まで也、六院の供分は後六東の御建立にて、六東祈願所也、此寺六院六坊所也、六坊は院家の老にて御番と申也



金剛寿院伽藍（「千葉妙見大縁起絵巻」）

(3) 中世千葉氏の妙見祭礼

(A) 千葉氏惣領家館時代

史料二 「千学集抜粹」

一、上野国群馬郡府中花園村七星山息災寺、武蔵国藤田へ御わたり有て、同秩父郡武光命の内大宮へ移したてまつり、又陸奥守良文鎌倉へ御供して、同村岡に居住し、八国を領し、子孫繁昌す也、遂に村岡に移し給ふ、これによつて良文を村岡五郎と申なり、御孫忠常、上総へ移し給ふとき、仁見三日逗留なされける、人見妙見是なり。忠常上総上野郷に居住し、後に下総に移り給ふ、是より忠常を下総権介と申也、同東ノ大友へ御供なり東追友とも、東大友妙見これなり、又上総大椎へ移し奉る、されハ妙見大菩薩ハ千葉嫡家に付せ給ふ、これによつて下総千葉庄池田郷千葉寺の宮へ移し奉る所、常重三男胤高これを竊みたてまつる所、いそぎ追駈しに、池田なる田の中へ匿しけるを、やかてたつね出し奉りて、常重の主殿に安置し奉りける、上下あゆみを運び祈念しけるとそ



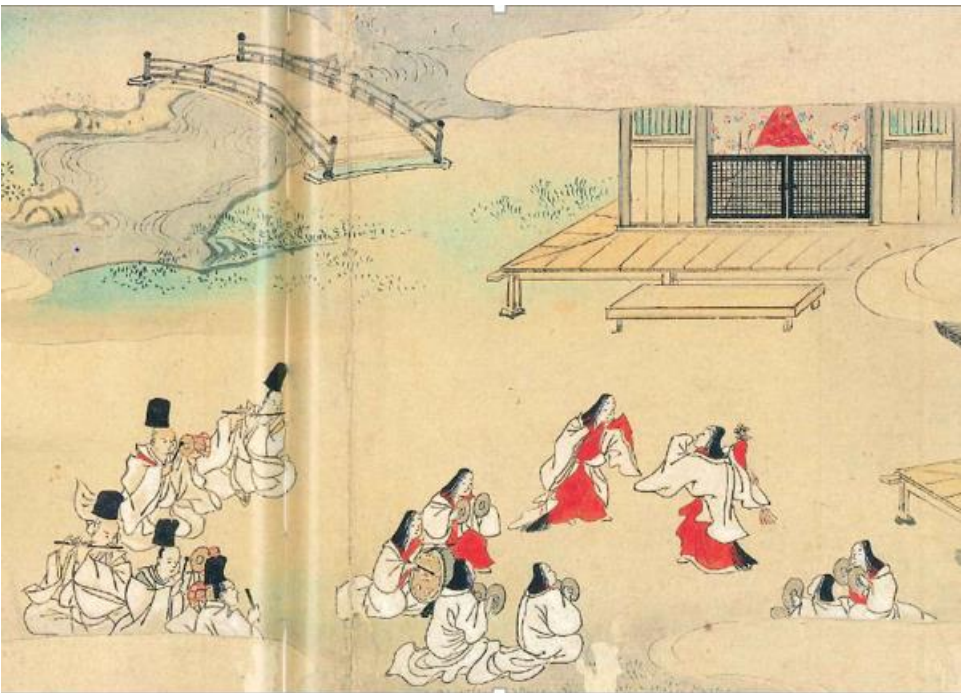
妙見を安置する粟飯原丈二郎と娘（「千葉妙見大縁起絵巻」）

(一)惣代七社大明神

金剛寿寺内における中心的な神社 〃千葉妙見に貢献した人々を祭る。

史料三 「千学集抜粹」

一、むかし妙見の屋形御堀内におハせしときハ、惣代七社の宮、八人の太夫、四人の八乙女を集めて、御神樂を上げ申さる、大旦那國中御祈願申也、八人の太夫ハ白張烏帽子に上下を着する也、四人の八乙女は禪振チハヒを着し、鈴と扇ミユを持って命舞ミユをする也、禪振は金欄緞子也、いろある絹もて仕立へし、袖ハ大にして、紅絲にて寄□せおくへし



楽器を奏でる神官と神樂を舞う巫女（「千葉妙見大縁起絵巻」）

史料四 「千学集抜粹」

惣代七社の事

- 一、 第一陸奥守良文、第二親王将門、第三良文嫡忠頼上野二郎、第四忠常下総権介、第五常時文次郎、同娘二人、己上七人物代七社大明神と現し給ふ、妙見大菩薩惣政所なり、八人の社人、四人の八乙女参りて屋形様および国中の御祈願申さるゝ也、供分ハ住持客殿に参りて御祈念申さるゝ也、

史料五 「千学集抜粹」

- 一、 屋形様御堀内に妙見のおへせし時ハ、社人物代の社三間、前殿五間也、右二見ハ八乙女、左二間は神主にて御祈念申也、正月朔惣代の御供物は加曾利寺山よりまゐる也、箸九膳、片方ハ寺山、同九膳、片方ハ加曾利也、七膳ハ惣代、八膳ハ八人太夫、四膳ハ八乙女也、

(三)神事

①. 年中行事

史料六 「下総国千葉郷妙見寺大縁起」

妙見御神事之事附年中行事之事

(中略) 年中の行事は先正月三箇日同七日三月三日四月八日六月七日七月七日同十六日同廿日廿二日是大祭なり、八月一日九月九日同十九日廿九日、十月は亥の日の祭、十一月朔日十二月朔日十五日廿二日なり、斯外住僧供僧神殿にをひて毎日妙見供三時の行法怠る事なし、社人は神樂を奏し神慮をすすしめ奉る、是皆天下安全国家鎮護の勤行前代の恒例万世不易の法筵如何夫可怠慢之乎哉

史料七 「千学集抜粹」

- 一、 御奉射の時、御宮にて酒三献、その時供分中、社人衆、殿原衆、御酒あり、

住持は出さるゝ也、三献にて酒まとハる、吉伝也 社人はしめてうちの射る礼なり、御奉射は神主太夫八人、供分六人、侍六人、凡廿人なり

史料八 「千学集抜粹」

一、極月二十七日、院内祈願に釜を清め、堀内にて御酒を上げ奉る、酒魚供物下さる、御酌は恩供役の者なり、

②. 大祭

史料九 「下総国千葉郷妙見寺大縁起」

妙見御神事之事附年中行事之事

千葉妙見毎年の御祭礼良文より七代の孫常重に及て大治二年七月十六日より始れり、大船を車の上に作り、綾羅錦繡を以て是をかさり、千葉の郷中をわたりて妙見寺大門の大庭に至てかの船の上にて舞楽をなせり、十二代時胤に及て天福元年七月廿日結城の御船始れり、其儀式始の船のことし、さて神輿は七月十六日飯屋へみゆき有て同廿二日帰座し給ふと云云、

史料十 「千学集抜粹」

千葉御神事は大治二年丁未七月十六日始る也、七世常重御代の事也、御幸飯屋は神主八人社家八人乙女四人、御祭の御舟は宿中の老者の役也、供物は千葉中野十三貫ところ也、同関錢諸侍衆上げ申也、一関は飯屋の供物を神主にとらせて、御祭を勧め申也

結城舟は天福元年癸巳七月廿日始る也、十二世時胤の御代の事也、御浜下りの御送りの御舟也、結城の村督に完倉出雲守と申もの永鏡のために取立しもの也、結城は今の寒川なり、大治二年御神事の始より天正二年甲戌まで凡三百四十三年也

史料十一 「千葉妙見大縁起絵巻」

一、千葉御神事大治二年丁未七月十六日始也、常重御代也、御幸仮屋ハ八人神楽男四人八乙女御祭也、御舟ハ宿中老者役也、供物ハ千葉中野ト申所ヨリ出也、結城御舟ハ天福元年癸巳七月廿日始也、時胤代也、御浜下之御送之御舟也、是結城町人之役也

(目)正月修正の祭礼

史料十二 「千学集抜粹」

一、千学集と申は、御家代々引付と妙見相伝の正月三日の夜の修正とハ、千文字・葉文字□□二字を題として、よろつことの葉を続けて、年中の事を願ハし給ひて、妙見の御前にて慚愧懺悔をし、年中の悪念を払ひ祭ることの御鈴なり、是一門及国内繁昌の御祈念也

神代より取り伝へたる鈴の音を聞て千とせのはにあふかな

鈴の音にあしきをあつめふりすて、よしそとおもふ新玉の春

史料十三 「千学集抜粹」

一、三夜の御鈴は、御幸ありて後、屋形様ならせられ、御鈴始る也、咲申事恒例也、座主鈴を取初て、屋形様御取あり、御一家中面々に取られし後、座主妙見の御前にて御祈願申さるゝ時、左衛門太夫万歳楽と三度申さるゝ也、妙見へ御酒を奉り、屋形様・座主両座になほり給ひて御盃出る、屋形様御酌にて三献、三々九度御式代ありて、初献は屋形様、二献は座主、三献は屋形様めしあくる也、御酒過てまかるとき、縁にて三度御礼有、座主神主供分には、縁にて二度御礼有、供分に御酒御式代、座中の儀式は座主のことく也、三夜の鈴の御礼として、宿坊へ御使一俵一本御超しなさるゝ也

(IV)元服

史料十四 「千学集抜粹」

千葉御家御元服儀式の事

桓武天皇の例に任せ給ひて、今において御位につかせ給ふ所、遠くハ天竺の太子檀特山に登りて御測位也、大唐王子天台山上て御測位也、近くハ日本王子、比叡山(皇)に井て御測位也、その例に倣ハせられ、葛原親王、高見親王、高望親王、いづれも山にて御測位なされし也、高望の御子良文、比叡山にて御元服あらせらる、後陸奥守となりて陸奥へ下りて、又関東へ移り給ふとき、若君をして上野国息災寺妙見大菩薩御宮前にて御元服なさしめ給ふ、即上野次郎忠頼と申也、此例に随ひ、住寺より御字を申請て、御神前にて鬮をとらせられ、御字を定め給ひて御元服あらせらる、此時寺家秘訣毘沙門天を妙見菩薩の御代りに新介三度まで拝し給ふ也、忠常、常将、常長、常兼、常重、常胤、胤政、成胤、胤綱、時胤、頼胤、胤宗、貞胤、氏胤、満胤、兼胤、胤直まで、以上十七世とも堀内妙見宮にて御元服也、其後、康胤御子胤持、輔胤、孝胤、勝胤まで以上五世ハ、平山におはしけれハ、平山より御参詣ありて妙見宮にて御元服なり、御供両人家子郎僅に定めぬ御警固御人数、国中いづれも御供なり、其例に任せ、昌胤御元服の時も佐倉より千葉へ御参詣有て、妙見宮にて御元服也、

(B)金剛寺客殿・仮屋・再建時代

① 妙見の移動と儀式の変化

妙見の移動による儀式の変化Ⅱ 「供分社人一所にて御祈願」

史料十五 「千学集抜粹」

一、 六人の供分ハ、屋形の堀内に妙見おはせしときは、住持の客殿に六供参り

て御祈願申せし也、甲戌年の世の中より後、妙見大菩薩を住持寛実のおへせる客殿へ移し奉り、供分社人一所にて御祈願申す也、今の御社の在所これなり、かの客殿炎上しぬ、廿三世輔胤のとき、五間四方に仮屋をは立給ふ也、廿八世親胤原式部太夫胤清代に、もとのことく御建立し給ふ也、座主覚胤の時とそ

史料十六 「千学集抜粹」

一、天文十九年辛亥十一月廿三日御遷宮也、(中略)御幸の儀式ハ庭儀灌頂の例也、導師歆喜院、大僧正貞斉和尚、御輿の前後ハ社人衆、次ハ別当・旦那衆、御宝物兆子、小別当・神役人、廿二町御鉾ハ千葉老成者、結城中老成者、御幡二流也、七月の御祭幡指の役人衆これを持る也、御宮にて法華八講大法事、次に神主衆・禰宜衆これを勤められ、大神楽を行ひ給ふ也、



客殿焼失（「千葉妙見大縁起絵巻」）

②. 馬のこと

馬の奉納↑下総の牧

史料十七 「東路のつと」

その夜、嵐烈しかりしことばかりなり。今日はこの日に日ものどかにて、葛飾の浦春のごとし。原宮内大輔胤隆の小弓の館の前、小浜の村の本行寺旅宿なり。

十四日五日は、千葉の崇神妙見の祭礼とて、三百疋の早馬の見物なり。

十六日は延年の猿楽、夜に入りて事果てぬ。

史料十八 「千学集抜粹」

一、 住持世々遷化に御移、跡は死に目に逢給ハす、(中略) 御神馬を納るものハ野辺へは出さるゝ也、

史料十九 「千学集抜粹」

一、 しりがいせんと申ことは、七月大須賀より御町へ家人御出にて帰る太夫に、御土産を御所望なされし時、しりがい一口を鳥目七百に替て上げ申させける、かへりし年またしりがい御所望也、町に候ハ代物一貫上げ申さるこれかかれいとなりて一貫ツゝ町に上り申也、

参考文献

- 千葉氏サミット実行委員会編『千葉一族入門事典』(啓文社書房 二〇一六年)
千葉市立郷土博物館編『妙見信仰調査報告書』(千葉市立郷土博物館 一九九二年)
千葉市立郷土博物館編『妙見信仰調査報告書(二)』(千葉市立郷土博物館 一九九三年)
千葉市立郷土博物館編『妙見信仰調査報告書(三)』(千葉市立郷土博物館 一九九四年)
千葉市立郷土博物館編『紙本著色千葉妙見大縁起絵巻』(千葉市立郷土博物館 一九九五年)
伊藤敬他校注『新編日本古典文学全集48 中世日記紀行衆』(小学館 一九九四年)